

熊川哲也のインスピレーションを掻き立ててやまない異色のヒロイン——その名はクラリモンド。

19世紀フランスの作家テオフィル・ゴーティエによる短編小説「死霊の恋」に着想を得た同名のバレエ作品を発表したのは2018年のことだった。ショパンの「ピアノ協奏曲 第1番」第1楽章に乗せて綴られたのは、ヴァンパイアである美しき娼婦クラリモンドと、彼女に魅入られた若き聖職者ロミュオーの禁断の恋物語。熊川はゴーティエの描いた夢現の世界を、持ち前の卓越した感性とドラマツルギーにより1場の作品として構成、ロマン主義の薫香漂う切なくも美しいラブストーリーに仕立て上げた。

あの絶賛の名作が生まれ変わる—— 熊川哲也が描き出す、生死を分かち愛の物語がいま!!

そして、約20分の小品ながら観客の胸に忘れがたい感動の記憶を刻み付けたあの絶賛の初演から4年——ついに満を持しての全編版が実現! 『クラリモンド～死霊の恋～』として新たな命を得る。

本作は小品で描かれた物語の前段となるストーリーを新たに加えて創作、全幕仕立てでの上演となる。クラリモンドとロミュオーそれぞれの人物像もつまびらかとなり、二人の出会いから別れ——彼女が愛ゆえに滅びゆくことを選ぶ——までのドラマが、より鮮烈に立ち上がることだろう。

また、多彩な登場人物も絡み進行するこの全編版において、クラリモンドの後見人で娼館のマダムであるバーバラ役として浅川紫織の出演が決定! 第一線を退いて3年、熊川の愛したミュージズの再びの舞台登場も見逃せない。

稀代の振付家・熊川が挑む“完成された名作”への新たなアプローチは、我々観客をどんな境地へと運んでくれるのか。ぜひその目で確かめてほしい!

『クラリモンド～死霊の恋～』全編

[演出・振付] 熊川哲也 [音楽] フレデリック・ショパン「ピアノ協奏曲 第1番 小短調 作品11」より第1楽章ほか
[舞台美術デザイン] ダニエル・オストリング [照明デザイン] 足立 恒

STORY

ベルエポック全盛期のパリ。稀代の高級娼婦と名高いクラリモンドは、自らがヴァンパイアであることを隠しながら暮らしている。その正体を知るのは、彼女の後見人であり、娼館のマダムであるバーバラただ一人。クラリモンドはバーバラの力を借り、自らが生きるため、若

い男の血を探しまわっている。

そんな二人の次なる標的となるのが、若き修道士ロミュオー。神父就任の式を目前に控えた彼は、俗世を知らぬまま聖職者として生を全うすることへの葛藤を抱き、修道院から逃走、夜の街へとやって来たのだ。バーバラは言葉巧みに彼を娼館へと誘い、クラリモンドと引き合わせる。彼女の魅力に溺れていくロミュオー。クラリモン

ドは恍惚状態にある彼の血をすすする。だが、彼女の悪魔的な力を目撃した常連客の画家ロートレックによって、ロミュオーの危機を知った神父セラピオンが娼館へと駆け付け、バーバラはクラリモンドを逃がす。

ロミュオーは身の危険に晒されたにも関わらず、愛しいクラリモンドを忘れられぬ日々を過ごしている。ある夜、眠りに着いた彼のもとに、クラリモンドが姿を現し……。

現代社会を映し出すコンテンポラリーの秀作

『FLOW ROUTE 222』

[振付] 渡辺レイ [音楽] ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
「コリオラン序曲 作品62」/「弦楽四重奏曲 第14番 嬰ハ短調 作品131」より第1楽章 / 「交響曲 第7番 イ長調 作品92」より第4楽章
[衣裳デザイン] 渡辺レイ [照明デザイン] 足立 恒



『死霊の恋』と同じ2018年に発表し、観客に鮮烈なインパクトを与えたコンテンポラリー作品が『FLOW ROUTE』だ。振付はキリアン率いるネザーランド・ダンス・シアターなど世界の第一線で活躍してきた渡辺レイ(現在Kバレエカンパニー舞踊監督)。

振付家がアフリカの大河の光景にインスピレーションを受け、創造した作品のテーマは“流れゆくもの”。水の温度や密度の異なる2つの川は、ある地点で合流するも、決して混ざり合うことなく、それぞれの色を保ちながら寄り添い流れていくという。そんな悠久の時を刻む自然のダイナミズムと、我々が生きる人間社会の在り様とを重ね合わせ

た。ダンサーたちが織り成す動きは実に個性的で斬新、しかもどこまでも洗練されている。その連なりに目を奪われるうち、ベートーヴェンそのものの力強い生命力に満ち満ちたクライマックスへ——。

4年前の初演時とは世の中の“流れ”も様変わりし、またKバレエも大きく世代交代を遂げた。『FLOW ROUTE 222』と題しての上演となる今回は、作品に込めたメッセージや躍動感あふれる振付の魅力はそのままに、新キャスト各々の特性を生かしながらブラッシュアップしていくという。移りゆく時代、そこで生まれる想い、そして新たな表現……あらゆる意味で2022年の“今”が映し出され、新鮮な輝きを放つことだろう。

クラシックの多種多様な美を凝縮した“活ける絵画”

『シンプル・シンフォニー』

[振付] 熊川哲也 [音楽] ベンジャミン・ブリテン「シンプル・シンフォニー 作品4」
[舞台美術デザイン] 鈴木俊朗 [舞台美術デザイン アシスタント] 佐藤みどり
[衣裳デザイン] 前田文子 [照明デザイン] 足立 恒

英国を代表する作曲家ベンジャミン・ブリテンが若き日に書いた同名交響曲に振り付けた抽象バレエ(2013年初演)。華やかさや気品、遊び心、情感……楽章ごとに趣を変えるこの味わい深くもテクニカルな交響曲を、熊川の振付は文字どおり一音たりとも取り逃すことなく可視化し、クラシック・バレエの多面的な美を描き出していく。

超絶技巧が心憎いまでにさりげなく織り込まれた密度の濃いステップを、優雅に、ダイナミックに、そして時にコミカルに紡ぎながら、3組の男女が次々と多彩なフォーメーションを展開していく様は、まるで精緻な絵画がキャンバス上で命を宿したかのよう。深い緑と黒で統一されたシックな衣裳と、赤を基調とした鮮やかな背景が生むハイセンスな色彩の調和も踊りを一層引き立て、この上なく贅沢な気分させてくれる。テクニシャンそろい踏みでKバレエが舞台上に描き出す華麗でエレガントな視覚美の世界に、ただただ酔いしれてほしい!

